

た。

昭和維新の歌（一五節あったと思う）

一 汨羅の淵に波騒ぎ

巫山の雲は乱れ飛ぶ

混濁の世に吾立てば

義憤に燃えて血潮湧く

二 止めよ離騒の一悲曲

悲歌慷慨の日は去りて

吾等が劔いまこそは

革正の血に燃ゆるなり

また赤壁があり、中国共産党の首領・毛沢東も

湖南の出身である。

上海への集結は本来、長江を下るのが得策であ

るが船は無く、鉄道で道人磯―岳州―漢口―鄭州

―開封―徐州―南京―上海へ出て乗船する。昭和

二十一年六月十一日、佐世保に上陸帰郷する。

後記 聞き取り担当者（守屋）

平成十六年二月十一日十一時三十分より二十時の八時間に及んで聞き取りしたわけであるが、矢崎氏は健康を害し安静、更に本人耳難聴であった。

矢崎氏は復員後農業に従事し、公職も多く、理財の才ありて財を成し、立派な家を新築している。また田畑も多く米作、果樹栽培も行い、質実剛健、軍隊生活でもあまり古兵とならず、大変人生に益する点多しと語っておられた。

擲^{てき}弾^{だん}兵

愛知県 鈴木和治

私の生家は小作農で両親と姉、私、妹、弟の六人家族でした。当時の高豊村の高根尋常高等小学校の高等科を卒業し、家業の手伝いしながら青年学校を卒業しました。

昭和十七（一九四二）年春に徴兵検査を受け、見事、甲種合格になりました。当時甲種合格になるということは若者として一人前の男として認められることであり、名誉なことでした。

入隊先は当然豊橋の連隊だと信じていたところ、意外にも兵庫県姫路の第一〇八連隊に入隊と知りびっくりしました。

第一〇八連隊は大阪の編成だったのですが、国軍の襲撃が頻繁にあるので、強化の意味で豊橋の兵隊を混成したのだと聞かされました。

昭和十八年四月十日、姫路の第一〇八連隊（連隊長、上野源吉大佐）の第五中隊に入隊しました。

同年五月二十日、姫路出発、五月二十二日、宇品港出帆、五月三十日、南支、広東の近くの黄浦上陸、広州市西村に駐屯する第二十三軍（田中久一中将）第一〇四師団（鈴木貞治中将）第一〇八連隊の第二大隊第五中隊に配属されました。

兵舎は学校だった二階建の木造建物でした。古

年兵は大阪出身者でした。内務班では、どこでもあるような初年兵教育が行われました。関西弁と名古屋弁とが入り交じった生活が始まり、初年兵の苦勞がしばらく続きました。

擲弾筒兵の教育が始まりました。一個分隊十五人で、筒手が二人、弾薬手が二人、小銃手が十人、分隊長が一人で計十五人の編成でした。弾薬手が一人八個の弾を持ち、筒手が各人四個の弾を持ちました。教練で沼地渡渉の時「小銃を高く上げて渡れ」と教えられました。実戦では銃を上げてたら目標にされ殺された戦友がありました。突撃の時は筒手は腰のゴボー剣を持って「突っ込め！」です。

昭和十八年九月十三日、第一期教育終了、広東付近の警備に当たりました。副官が馬に乗ってきて「俺が旗を振ったら打て」と言われ、弾丸を込めて用意しました。やがて副官が合図の旗を振ったので「射て！」と命じたが弾が出ない。「なぜ

だ」と発射したが依然として出ない。よくよく調べたら弾が湿気でぬれていた。副官が馬で飛んできて「なんで射たないのだ！」と怒る。あげくの果てに「鈴木！ 貴様は精神状態が悪い、軍法会議だ」と。

こちらは「濡れた弾をよこしておいて何が軍法会議だ」と反論した。上野連隊長が私に頭を下げたので一件落着きましたが、一兵卒に謝罪した上野閣下（間もなく少将に進級）は偉い人だったと思います。

昭和十九年八月から十二月までは湘桂第二期作戦で最も激しい戦いでした。敵機の襲来が日増しに激しくなり、昼間の行動は制約され、次第に夜間行動に移行してきました。月の位置と時計の針から方向を計って進軍するようになり、小隊長に前進方向を教えました。

ある時、友軍が包囲され、救出に向かった兵隊が敵弾にやられ、このままでは友軍の全滅は必至

となった時に、隊長が「誰か救いに行く者はいないか」と叫んでいました。出た者は必ずやられました。私はその時、覚悟をきめて飛び出し救出に成功しました。隊長から「よくやってくれた。金鵝勲章ものだ。上申してやる」と言われました。

私は入隊する時には大きな望みを持っていました。それは「軍隊へ行ったら金鵝勲章の一つでも貰うような手柄を立てて、除隊したらオーストラリアの大平原で、機械を使って大農式の農業をやりたい」と希望を持っていたのです。そんな気持ちがあったものですから友軍救出に名乗りをあげたのだと思います。

敗戦のため金鵝勲章も貰わずになりましたが、上申の手続きは間違いなく取ってくれておりました。

第二期作戦は敵飛行場壊滅作戦で柳州を昭和十九年十一月十日に攻略し、続いて南寧に向かい、十一月二十四日、これを占領しました。南寧の向こうはもうインドシナです。難民がいっぱい真っ

黒になって避難していました。

高里飛行場を占領しました。湘桂作戦も反転作戦に移行（第三期）し、我が部隊も恵豊作戦に移ってきました。

内地からの補充兵は昭和十八年の暮に名古屋から来て、同十九年春には同じく名古屋から現役兵が入ってきました。

私も昭和十九年の夏に上等兵となり、擲弾筒の筒手としての腕も磨きがかかり、對抗演習の射撃では腕を振りました。私の照準のポイントが他の隊の狙う的となり、試合の時には、他隊の将校が私の狙うポイントを盗み見ては自分の隊の射手に教えておりました。

いつだったか月日は忘れましたが、私の中隊長が試合の時に、私に色々指図をするので無視していましたが、せっかくと思い隊長の指図通りに従ったら、見事的から外れて負けてしまいました。

戦後、中隊の戦友会で中隊長に会った時にその

時の話をしましたら、隊長は「誠にすまなかった」と頭を下げられ恐縮したことがありました。

湘桂作戦が終わって間もなく、部隊が海南島に上陸作戦ということが噂になりましたが、いつか消えました。

そのうち敵機の来襲も次第に少なくなり「様子がおかしいな」と思っていると突然、兵器の返納の命が下り、菊の御紋章を消して、手入れを充分にしました。

間もなく八月十五日の終戦の詔書が下り、毎日二食が中国軍から給食されるようになりました。白米と高粱が半々でした。

一食分は、部落へ出かけ勤労奉仕で作業をやり、そのお礼で昼食を御馳走になりました。中国の子供達からの投石は私達にはありませんでした。

抑留といっても形だけのものでシベリアでの抑留とは全く違うものでした。

昭和二十年九月二十七日、

博豊県増田出発、恵陽県万年着。

同年十月十四日 恵陽県万年出発。

同年十月十七日 恵陽県天還着。

昭和二十一年二月十一日

天還出発、東芝県官備着。

同年四月一日 虎門港出帆、日本の貨物船。

同年四月八日 懐かしの故国日本の浦賀港

に入港。

懐かしい我が家へ一時間でも早くと気がせきましたが、いつまで待っても下船準備の号令がかかりません。囲りを見回すと復員船が三十隻も待機している状態でした。何事やと思ひしや何とコレラ患者が発生して上陸禁止とのことでした。

毎朝ランチ（小型船）が各復員船を巡回する。

その船上には白布に包まれた棺が積まれているではないか。何と哀れなるかや。戦場を生き抜いて我が家へ一歩近づきながらあの世に旅立ちとは

……。

待つこと何と一カ月、ようやく下船が許され故国に上陸しました。入営以来三年間、留守にした我が家へ無事帰れた喜びは、家族全員異状なしで倍増しました。

上陸した時に着替え用の新品が品切れとあって戦衣を着たまま帰宅しました。着古した予備用を一着くれました。

現在も農業で米、野菜（カンラン、白菜）を作っています。子供が三人、外孫が二人、内孫が三人おり、孫が我が家の主力で農業をやっております。

私は擲弾筒の射手としては自信がありました。敵の歩哨を狙って真上から直撃し、隊長から「よくやった」と誉められたものでした。